無いやうに思はれる爲である。それではこの問題をどう解決してよいか。思ふに兩卷は共に敦煌の出土であり、宣元至本經の名は、尊經の中にも明記せられてあり、さうして經讃兩卷ともその行文や內容に於て到底現代人の僞作し得るものでないことは明らかである。さうすれば畢竟疑念は矢張り識語の上に懸けられねばならず、大秦寺といふ名の行はれることになつた天寶四載以後に、大秦景教典として行はれ傳寫せられたこれらの兩卷が、敦煌の佛洞から發見せられた後の或る時に於て、景教史に深くも通じない何人かによつて、巧みに殘經の字體に似せて卷末に附記せられたのではなからうか。然しながら由來景教關係の文獻には、かの景教碑文や、またその中に記されてある貞觀十二年の詔のやうに、それが初めて知られた當時に於て、僞作の疑が濃厚にかけられ、その後研究の進むにつれて、さうした疑の一掃せられた例もあることであり、この識語の眞僞についても、將來なほ精細な研究を要することゝ思ふ。今後學者により、こゝに余の疑として述べたところが、見事に氷解することを希望してやまないのである。

なほ一つ殘つた重要の問題は、李氏の舊藏として知られてゐる大秦景教宣元本經の首部三十行とこの大秦景教宣元至本經尾部との關係である。これについては余は別の機會に於て檢討することにするが、今こゝに所見を簡單に述べるならば、兩者が同一經の首尾であることは多分間違ないであらうが、それに拘はらず、それぞれ別個の寫本であつて、同一本の首尾でないことだけは確かな根據に立つて斷言出來る。

註①　敦煌發見の景教經典一神論。（藝文九ノ一、編者註、本卷所收）

景教經典序聽迷詩所經に就いて。（內藤博士還曆祝賀記念論叢、編者註、本卷所收）